

祈りの庭 —異なる祈りが調和する場の計画—

浅井龍空

指導教員 渡辺菊真

高知工科大学 システム工学群 建築都市デザイン専攻

1. 設計の背景

祈りの空間は、祈りのためだけにつくられるため、世界観や宗教観が最も純粋な形で空間に現れる。世界には様々な祈りの空間が存在し、その空間体験は感動的である。

しかし、特に一神教の祈りの空間は自己完結的で、時に排他的なこともあり、同じ場で体験されることは少ない。異なる宗教の祈りの空間が共存・調和し、相互に空間性を高め合うような場を構築できないだろうか。

2. 設計の目的

本設計は異なる祈りが調和する場の計画を目的とする。その場を「祈りの庭」と呼称する。

対象とするのは、世界の代表的な一神教である、キリスト教の教会とイスラム教のモスクである。

これらの調和に日本の空間構成法を導入する。日本は多神教の国であり、神道と仏教の習合といった異宗教の調和の歴史が長い。また、自然信仰を根に持つ空間構成や、それに基づく様々な庭のあり方は、異質を調和するために有効だと考える。

3. 設計の条件

- ① 教会、モスクの各祈りの空間は、自立性を備える。
- ② 全体としては両者が調和した、ひとつの場となる。
- ③ 調和の方法として、日本の空間構成法を導入する。

4. 日本の空間構成法

① 自然信仰を根に据えた自然風景との結合

神道は元来、自然信仰を根に据えており、川や山といった自然風景と結び付いてきた。

本計画では、自然信仰の考え方を手がかりに、祈りの空間を自己完結させるのではなく、敷地の地形や周囲の山並みといった自然風景と結び付けて構成する。自然を共通の背景として用いることで、それぞれの自立性を保ったまま同じ場に配置し、調和させる。

② 異質を束ねる伽藍

法隆寺西院伽藍は、金堂と五重塔という2つの異なるボリュームを、ひとつの限定された領域にて併存させている。

領域は回廊により矩形で形成され、金堂と五重塔は領域中央で、門に対して横並

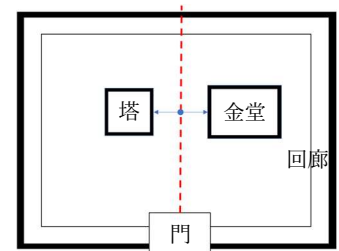


図 1. 法隆寺西院伽藍の構成

③ 庭の回遊性見え隠れ

桂離宮庭園は建屋も景観構成の一要素とした庭園である。庭園内は回遊形式となっており、書院・数寄屋・草庵とその各々の庭が配置されている。これらの異質の空間は、障り木による見え隠れの構成によって連続的につなげられ、歩くという行為を通してひとつのまとまりとして体験される。

また、借景によって敷地外の山並みや自然が庭園の一部として取り込まれる。

5. 敷地の選定

5-1 高知県香美市土佐山田町

物部川と河岸段丘、山々を中心とした、豊かな自然風景が織りなされている。また、地方部にありながら、大学の留学生や農業の技能実習生が生活しており、キリスト教徒、ムスリム双方が在住する。

5-2 山田島の窪地

法隆寺西院伽藍に見るように、領域を規定するためには回廊が有効である。しかし、回廊は同じく回廊を有するモスク中庭の空間性を阻害する。この窪地では土手や石垣といった自然に近い地形が、天然の緩やかな回廊として機能し、この問題が解消される。

また、地形によって住宅や道路、ビニルハウス等が隠れ、雑多な日常風景と切り離すことが可能である。



図 2. 山田島の窪地

地理院地図に文字と図形を加筆して掲載



図 3. ①②：窪地上、③：窪地内

6. 設計の指針

6-1 単位建築の設計の指針

教会とモスクの空間の違いのみを明示したいので、装飾などの具体的形態は排して抽象度の高い空間とする。

6-2 「祈りの庭」の設計の指針

- ① 自然信仰や借景を参照し、2つの建築を自然風景と結びつける。
- ② 2つの建築配置に幾何学的秩序を与えて伽藍化する。
- ③ 庭に回遊性と見え隠れの構成を与える。

7. 設計の手順

7-1 単位建築の設計の手順

① 教会とモスクの形式の設定

キリスト教会については、バシリカ式教会三廊式を、モスクについては、中庭と多柱室を基本とするアラブ型モスクを形式とする。

② 規模と形状の設定

教会は、幅 7000mm、奥行き 14000mm、高さ 4000mm の箱型ボリュームを基本形とする。モスクは、中庭と礼拝室の2つの空間から構成されるため、教会の2倍の規模とする。

形状を箱型で統一することで、空間構成そのものの違いを際立たせる。

③ 空間の抽象化

設定した形式および規模をもとに、世界観や宗教観が現れる要素を抽象化し、その特徴が空間で現れるようにする。

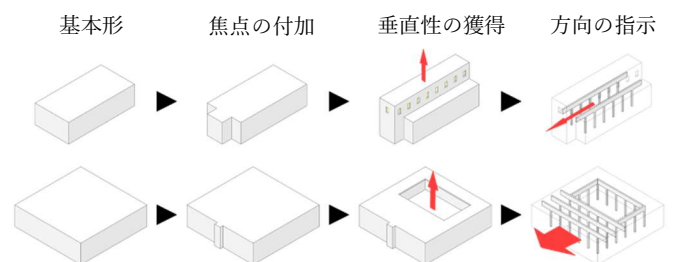


図 4. 単位建築ダイアグラム (上：教会、下：モスク)

7-2 「祈りの庭」の設計の手順

① 2 建築を自然風景と借景で結ぶ

垂直性の強い教会と水平性の強いモスクを強調できる自然風景を選定して借景する。

② 2 建築の伽藍化

2 建築の骨格をなす軸線と、2 建築の建つ地盤の領域を幾何学的に定めることで伽藍化を図る。

③ 伽藍周りの造成による回遊動線と見え隠れ

伽藍周りを単一の傾斜で傾けるように造成し、回遊動線をつくり出す。また、植栽による見え隠れの構成を導入する。

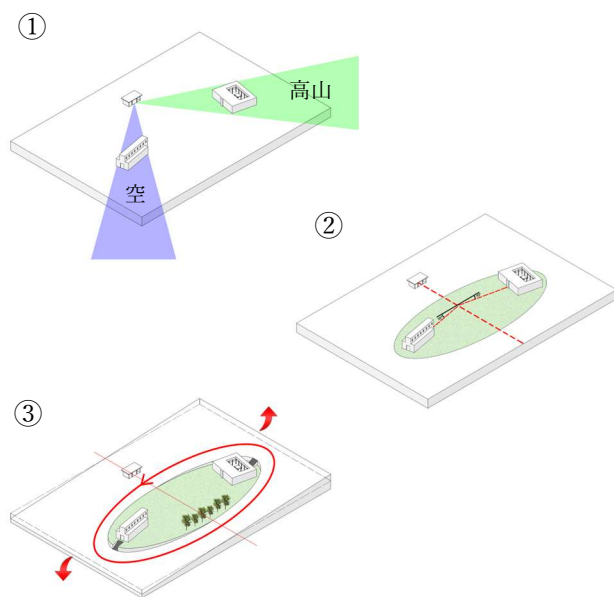


図5. 祈りの庭ダイアグラム

8. 設計の内容

8-1 単位建築の空間

① キリスト教教会の空間

キリストは東から昇る太陽の象徴とされ、東を向いて礼拝する。最奥ではアプスが突出している。ハイサイドライトによる上方からの光が上昇性を感じさせる。パースの効いた列柱が、奥行きで祈りの方向を示し、アプスに向けて人々を導く動的な空間となっている。

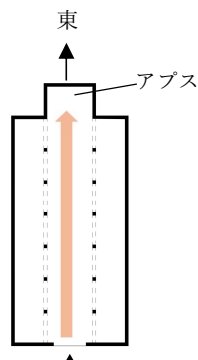


図6. 教会平面図



図7. 教会内観

② イスラム教モスクの空間

礼拝室と中庭から構成され、メッカの方向を向く。キブラ壁にはメッカの方向を示すためのミフラーブというニッチが穿たれる。中庭部分は空へ垂直に抜ける。幅広矩形と均質に並んだ列柱は空間の無限性を表す。メッカに直交する向きにアーケードがかかり、奥行きではなく面によって祈りの方向を示す。

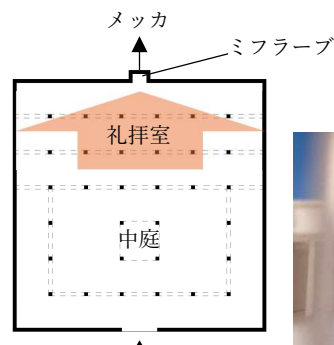


図8. モスク平面図



図9. モスク内観

8-2 「祈りの庭」の空間

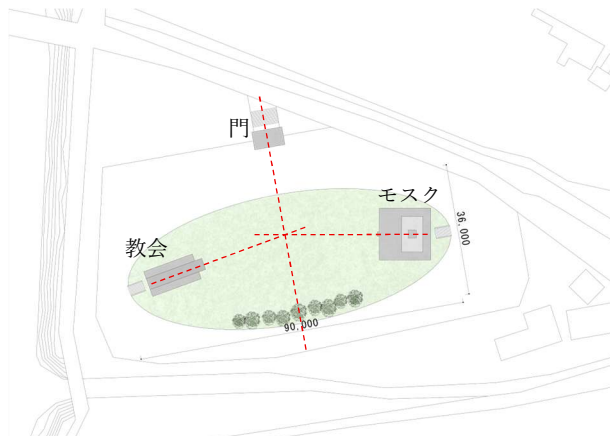


図10. 配置図兼屋根伏図

① 2 建築と自然風景の借景

教会は背景を空とすることで、垂直性の強いボリュームが際立つ。

一方でモスクは高い山が背景となることで、風景から浮かび上がらず、地面に密着した水平性の強いボリュームが際立つ。



図 11. 教会と空



図 12. モスクと高山

② 2 建築のある伽藍

門から教会とモスクの入口までの距離を揃え、 20° のズレを 10° ずつ等価に分け合う。また、同一水平面上に置かれ GL も一致している。不定形の窪地の中で楕円形水平面が際立ち、幾何学的な伽藍の印象を強く与える。

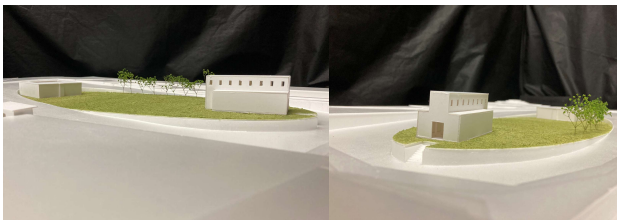


図 13. 公平な扱いを可視化する楕円形水平面

③ 回遊と見え隠れ

楕円形平面と高低差によって巡る動きを誘発する。

教会に向かう際、動線は徐々に下降し、垂直なボリュームがより高くそびえ立つように見える。内部に入るとき段差を上がることで上昇への意識を促す。

一方でモスクに向かう際は、動線が徐々に上昇し、伏せて見えることで、地面に密着する水平なボリュームが際立つ。内部に入るとき、斜面から段差を下り、水平面へと着地することで水平への意識を促す。



図 14. そびえ立つ教会

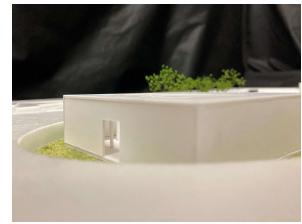


図 15. 地面に密着するモスク

片方の祈りの空間から次の祈りの空間へと向かう際、敷地の南側を通るが、この時水平面南側で東西に広がる植栽帯が祈りの空間を半隠しにする。これによって対比感を和らげつつ、同じ庭の中で異質な 2 つをシークエンシャルに結び付ける。

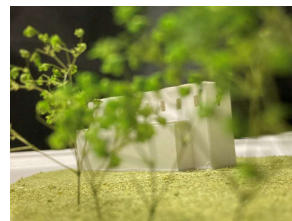


図 16. 見え隠れする教会



図 17. 見え隠れするモスク

9. まとめ

キリスト教教会とイスラム教モスクが日本の空間構成法を介して調和する場を構築することができた。

本建築が、異なる宗教の祈りが対立することなく同じ場に存在し得ることを示し、世界観や文化の違いを空間体験として理解するきっかけとなることを期待する。

10. 参考文献

- ・ 国土地理院地図
- ・ 「世界建築史 15 講」編集委員会編 「世界建築史 15 講」 彰国社 2019
- ・ 中川武監修 「世界宗教建築事典」 東京堂出版 2001
- ・ 稲次敏郎 「環境デザインの歴史展望—日本—」 山海堂 1991